



幼児の歸つた後のしぐま

倉 橋 惣 三

保育は幼児の歸ると共に終る。しかし、先生にとつて大切

なのは、その後である。しぐまなんて、氣どつた時間がある訳ではないか、おかえり、さようならの後しばらく、小半ときか、そのどや／＼のおさまつた一とき、あたりがしいんとする時がある。先生のほつと息をするときであり、ひとり椅子からだを投げるときであり、だまつて目を閉ぢるときであり、ぼんやり窓から外を見るときであり、なんというところもなく庭へ出てぼつねんと木の下に立つときでもある。なにも一々そういうしぐまをするときという訳ではないが、動きづめのからだに、ちよつと憩いが与えられ、子供を見るにのみ忙しかつた目が内に向き、子供を追つていた心が自分というものに歸る時間である。

それが余り長くなると、眠りに落ちて仕舞うこともあるがまどろむでもなく、況んやぐつすりでもなく、うつとりと、保育の酔いを味う瞬間というか。快いというも強すぎる。

楽しいというも興じすぎるが。

保育の味は元來が淡いものである。中に甘味も苦味も含まれていながら、そのあとあじの淡さは、よい茶の服後に似るべきものである。茶の味は飲んでゐる間よりも、残る後味にある。一滴の玉露でも、大ふくの濃茶でも、味わうともなきおのづからな後味が貴い。それを、あわたゞしく座を立つては惜しい。

保育も、といつて、素より、その香味の質もその味わい方も一つではないが、子供たちの歸つた後の一ときの貴さという点に差りはない。そうして、その後味を粗末にする人とは共に保育を語りあえないといつてよからう。

保育が幼児のために何を残すかは、素より大切なことである。がまた、保育が日々にわれらに何を残すかも貴重なことである。朝に保育の目的と企画があり、昼に保育の過程と実

際があり、その過程と実際に、幼児と一つに我れを忘れる没頭があり、かくて、保育のために働くわれらの日々が過ぎてゆくのであるけれども、われらは、その、たゞに過ぎゆくことだけでいいものだろうか。残すものは、たゞ幼児への業績だけであつていいものだろうか。保育三年、われに何が残るのだろうか。保育五年、われに残るものは何んであるうか。而して、保育十年、たかゞその業績の記録が残るだけでいいだろうか。その業績も、小さいものでは決してないが、必ずしも著しいものではなく、とり立てゝ大に酬いられるものでもない。少くも、あまり大きく酬いられようと思つたら、恐らく失望させられることも多いであろう。根を培うものは必ずしも思い通りの大輪を期待し難く、希望通りの果実を收穫し得ないかも知れないからである。少くも一日々々の保育の業績を重ねてわれひと、目をみはることはできないであろう。残るものは、日々に味う保育の香の、忘れ難い思い出である。後に残るとも知らなく、人に告げようもなく、その日その日に快よい酔い心地こそである。

快よい酔い心地というけれども、その快さの中には、疲れもあり、苦勞もあり、一人々々の子供に濟まなかつたと思う悔恨もないではない。うつとりとしたまの中に、浮び出てくるものは、幼児のあの笑顔であると共にあの泣き顔である。馳けぬけて得意な顔であると共に、すべりころんで涙面つくる顔である。寄り添うてくるまるい肩と共に、時には不

機嫌に淋しい背を見せて馳けて去る後ろ姿がある。今頃はあの町を、足踏み鳴らして帰つてゆくと思う子を追いかけて、後ろからその肩に手をかけたくなることもある。今頃はあの畔道を、とぼゞとひとりゆくと思う子に追いついて、さつきの不愛想を詫びたくなることもある。なぜそんな歌い方をすると叱つておいて、すぐそのあとから自分でも歌いそくなつた失敗を、ひとりで可笑しくなることもあり、やめなない泥いたづらをやめさせようとして、却つて子供のエプロンを泥だらけにした不手際に、ひとりできまり悪く思い出すこともある。こまかくは、あのとときの返事の気のなさ、答え方のまづさ、子供とした約束を、うつかり忘れていたこと、子供の喧嘩に気短かな仲間おりをさせたこと、あれやこれや、人知れず頬をあかめることもある。しかも、それらがどれも、これもひきくるめて、ほんのりと保育の香を味わせてくれるのである。敢て、保育の反省といわない。保育の経験ともいわない。初夏の風かおる午後そういう貴いしどまが、先生方によくあるのである。

このしどまから、ふとわれに帰つて、保育室のあとかたづけが始まる。あすの保育の準備が始まる。――帰りを急ぐ先生や、すつかりぐつたりしている先生や、お稽古ごとや、アルバイトに氣をとられ勝ちの先生達には、保育が忙しい仕事としてあるだけだつたり、往々にして片手間仕事として行われるだけだつたりする。――あじけない一日々々ではあ